

早稲田大学高等学院研究年誌第61号 抜刷
2 0 1 7 年 3 月 発行

ひばり

サンタヤナ著・仲島陽一訳

ひばり

サンタヤナ著・仲島陽一訳

【訳者前書き】

著者サンタヤナ (George Santayana, 1863-1952) について、以下主に『西洋人名辞典』によって記す (ただし*は平井正穂氏による)。スペイン生まれ。1872年に両親とともにアメリカに渡り、ハーヴァード大学で学び、同大学哲学教授を勤める (07-12) (*1889年から)。アメリカに帰化した (*最後までスペインの市民権を捨てなかった) が、12年以降、ヨーロッパで (*夏はロンドンかパリ、冬はローマで悠々自適の生活を) 送った。ドイツ流の観念論に対立する自然主義的立場をその著*The Life of Reason*, 1905-06において明らかにし、*The Realms of Being*, 1927-40と総称する数巻の著書でさらにそれを発展させ、批判的实在論の代表者となる。詩集も出し、カルヴァン主義とエピキュロス主義を対照させた小説*The Last Puritan*, 1935を書いた。以上。

哲学的には、私個人としてはあまり賛成できるものではない。またその後あまり問題にされていないことから、一般に評価が高いとも言えないであろう。むしろ文筆家として味がありエッセイのほうがなお読むに値すると私は考える。ここに紹介した「ひばり」は名文であり (訳で伝えられたかどうかは心もとないが)、内容的にも感じ入らせ、考え込ませるものがある。

底本は*Santayana, Soliloquies in England and Later Soliloquies*, Constable and Company LTD, London, 1922であり、その第26章になる。

【本文】

すべての粋な英国人の中には一個の詩人がいる。その胸中深くには自由な活力の小さな泉があるが、生活の急務のために汲まれず、掌中の技術によっては露わにされ得ない。沈黙の、または宗教的な瞬間にだけ、それを汲んで飲み、

(108)

内なる自由を回復して喜べるのである。日々の仕事すべてから脱したいっときほど、彼が自分自身であるのを感じることはない。それゆえ彼の宗教はかくも淡くあるいは（彼が言うかもしれないように）かくも清いのである。それはどんな個別の情熱にも出来事にも関係を持たない。青く澄んだ空のように、遠く、安らかな、特徴のない背景である。それゆえ彼は自然を、そして田園生活を愛し、都市と俗衆を嫌う。自らが好むものを、弱々しく感傷的で白衣をまとったものと思い描く。彼の胸中の黙せる詩人はひとえに叙情詩人なのである。こうした稀で空想的な幸福の酔いからさめると、因習と見せかけの覆いを通して見るのでなければ、自らを現実世界と、あるいは自分自身とおりあわせるのを難しく思うであろう。彼は自らに関して正直であり自尊を保つことができなかった。他の人々に関して率直であり親切を保つことができなかった。しかし万人に親切で自らの内面に真率であることが、彼の深い願いなのである。なぜなら、たとえ人生がそのむきだしの真実においては、粗野なメドレーと残酷なビジネスであるとしても、にもかかわらず、それを通してそこここで輝き得る精神〔霊〕¹⁾の完全な美によって、彼の人生は償われるからである。ハムレットは牢に囚われたこの精神〔霊〕の古典版であり、ひばりはこの霊がその自由においてあり得べきものの象徴であるように思われる。

哀れなひばりたちよ！ 彼等の体において鈍重な物質は、私達の体においてより、本当に割合が少ないのか、私はいぶかしむ。彼等は食物をみつけ子を養ってはならないのか。彼等なりに労働し、警戒し、心配してはならないのか。寒さ、飢え、そして病いは、けだし私達の大部分よりも、彼等をより多くよりつらく襲うであろう。しかし私達は彼等について自分勝手に、舞台の俳優についてのように、私達の注意を引くときにまとう役柄においてだけ考える。野を歩いて歩くとき、私達は彼等が空で演技するのを見聞きするために立ち止まり、しかして彼等の家でのごたごたのことはけっして考えない。それを彼等もまた、いつきの間逃れたもののように思われるのだが。少なくとも彼等はそうした地上のごたごたを離れ、この贅沢な歌すべてのための活力と時間とを十分に持っている。このいつきであっても栄えある解放が、内部生命のこれほどの

甘さでのしかも絶対的に挑戦的なこの高揚こそ、粋な英国人みななのなかの詩人が、ひばりにおいて愛するものである。それは私達以上に幸運な同胞たる霊を、いやほとんど私達の導師を啓示しているように思われる。

ひばりはシェリー²⁾をさえうらやましがらせたが、誰でも彼に劣らず、恍惚においてか放心においてかその天分のために、彼等をうらやむ理由を持っていた。シェリーの人生の外的環境でさえ、彼の靈感³⁾にとても好都合であったし、彼が選びとるだけ多くまた強く自由に〔詩を〕さえずらせた。しかしたぶん彼は距離の感情⁴⁾に幾分期かれていたのであり、議会で議員がさえずる英国よりも、鳥の国⁵⁾では悪い鳥や邪な伝統は圧政的でないと空想していたのだ。人間性は真実には、プディングやポートワインや狩りや選挙のために、また大学ではしゃぐことやギリシャ語を読むことのためにさえつくられたのではなく、ただ罪のない抒情的忘我と燃える確信のためつくられた、と彼は考えたように思われる。ただしこうした忘我や確信はなんとかして、人々を貪欲や嫉妬や残酷にさせないようにすべきで、また誰かが何かを選んで行うのを妨げるために彼等を抑えるべきではないようなものとしてである。たぶん実際、英国の野原がひばりに好都合なのと同様、オックスフォードの回廊とロンドンの街路は、人間性に本当に可能な飛翔に好都合である。そこには思想のための糧がある。しかしシェリーは人間性に耐えられなかった。社会が、若干の親切によってやわらげられた無慈悲な野心と嫉妬の蜘蛛の巣であることがわかって恐れた。人生ははかなく、環境と競争者に対するその唯一の武器が、知的行動、知的戦争であることを忘れた。その生存の基本的に地上的な面では、ひばりにおいても事情は異ならない。それでもその飛翔は生身のもので、技術や反省でなく生きる活力の祝祭的なほとぼりであるので、内なる人の全き自由を、不可能である一つの自由を、私達に暗示するのである。

しかしながらひばりの飛翔においては、この物質的領域のうちにあつてさえ、幸運の稀な好意によって、すべてが自発性、勇気、そして信頼であるように思われる。調整や観察であるように思われるものは何もない。空中での彼等の生は、生存の盲目的衝動における、一種の無垢と幸福と陶酔である。彼等は朝の

(110)

声であり、経験を求めるがそれを記憶はしない若い心である。むせび泣くように思えるとき、息をついているだけである。地面からロケットか噴水さながらに猛然と飛び出し、はじけて火花か露の雨になる。回転しながら登り、光の層を一枚ずつ通って舞い上がっては、まっさかさまに落ちる。彼等の歌は小川のせせらぎのようで、細やかに変わりつつもはてなく、そよ風のなかですべての音量に変えつつ震える。彼等の恍惚は私達には天使のもののように思われるが、光り輝く高さから私達の目に見えず降りて、私達をきよろつかせる——それ自体は安っぽい崇高さだ——からだけでなく、むしろひばりがかくも絶対的に、ただ歌わんがために狂おしく歌うからである。ひばりは明らかに休日を祝っており、何か究極的でまったく無用なものに、まさに（無用で究極的であるので）崇拜あるいは供儀の行為に似た利那的で魅惑的な快樂に、そのありったけの力を費やしている。ひばりの中の生そのものが純粹になったのだ。私達がうらやむのはそれである。その声を聞くと、私達は深く嘆息せざるを得ないし、たぶん一鞠の涙も目に浮かべよう。私達の労苦を結局徒勞に終わらせるもの、しかしその労苦を正当化もするであろう唯一のものを、ひばりはかくも意気揚々と得ているように思われる。すなわち幸福、無我、霊の中で生きられた生のひとときを。そして心中こう言いたくもなろう。ああ、忘れることさえできるなら、来し方行く末を思わずにいられるなら⁶⁾、薄暗い考えて奴隸や卑怯者にならずにいられるなら！

ひばりにあるような生の恍惚は確かに人間にさえ未知ではなく、その暗示は英国人を力強く魅惑する。彼等は精神的に若いので遊びへとなお促され、恋や政治や宗教やにおいて、ある種の天国へと彼の自己全体を運び入れる自信をなお持っており、自然のものを自然へと任せておいたり、神のものを神の中に隠しおいたりはしない。ああしかし、彼が十分におとなになるならば、学ぶべき悲しい教訓が彼を待っている。長い訓練か適応の奇跡かによってまえて自然の楽団全体と彼とを和音で結んでいなかったなら、生の恍惚は必ずや破局に至る。踊ることと歌うこと、恋と遊びと宗教的熱狂とは、力強い酵母である。旬の時にそれらを発散する者は幸いである。しかしもしも義務に転じられ力づ

くで詰め込まれ、または道徳や科学のような何か生真面目なものの成分にされるなら、それらは悪徳になってしまう。靈感の野生の息吹は、それらをせかせて輝く雲のような魂を通り抜けさせてしまった。靈感は、プラトンの行間から読み得るように、魂あるものである。それは深みから、あのヘスティアの炉⁷⁾から、保守的な異教徒が神聖なものとして崇拜しないではいられなかった母なる大地からやってくる。しかしながら技術と理性だけが道徳的意味において神聖であるが、それはそれらが靈感ほど自然ではない（その種と気を伴う母なる大地が万物の根であるので）からではなく、それらが秩序、美、知的光の最上天のほうへ、また永遠の尊厳の達成のほうへ登っていくからである。存在のこの次元においては、羽根のない二足獣〔である人間〕さえも上機嫌で舞い上がりさえすることができる。しかし宇宙は人間の本領ではない。今や私達が持っている飛行士は、新手の船乗りに過ぎない。彼等は危険と高給のために飛んでいる。少年の技術であり、そのロマンティックな栄光はすぐに色褪せ、その技術と困難すべてに対してただ物質的な報酬だけが残される。人間に唯一可能な崇高さは知的なものである。他の何らかの次元において崇高であるとしたら、単に愚かで大げさである。人は知性によって、それを所有する限り、事物があるがままにみとり、自らの五感と情念とを超越し、時空における自らの偶然的地位を根こそぎにし、未来の万物をまるで過ぎ去ったもののように見、過去の万物を常住するものと見、自分自身を断罪すると同時に赦免し、世界を諦めまた愛する。神性へと開かれたこの内なる道を持つことで、人は一個の道化となって、自分達の忘我においてひばりと競うであろう。

人の翼はその知性である。失敗に終わらざるを得ないその動物的意志にそれが最終的成功をもたらすということではなく、その失敗自体を、固有の幸福である笑いと光の気圏へとその翼が持ち上げるということである。ひばりならぬ人は、朝まだき若気の至りで、生が始まらんとうずいているがゆえに無責任な生気の暴発で、見事な飛躍をなすことはできない。その種のことはかごの鳥の羽ばたき、環境と凡庸への反抗であり、精神のしるしではあるが、冷静沈着な精神ではなく、幸福でも幸福の修練でもない。生をその頂に抱く思想は、生を

(112)

その過程に渡って伴い得るし、その終局と私達を和解させ得る。知性はその広がる光においてホメロスの如くに広大である。知性は自然の仕事すべてをたどり、自然をかわしても乱しはせず、確かにそれを実際以上に愛すべきものにし、それを虚栄から救い出す。

感覚は、いつも私達の肘をつついて、「見て、見て、あれは何？」と言う、生き生きしたこどものようである。意志は憤然として代案を求める雄弁家のようである。歴史と虚構と宗教とは、事実を絶えず再構成して事実の中にはない何か悲劇的な統一をつくる詩人のようである。心のこれらの形態すべては霊的なものであり、またそれゆえ物質的には余分で自由である。しかしその霊は敬虔でその源に注意深く、またそれゆえ心配を背負っていて、ひばりの、あるいは人間の音楽家の音楽からさえもそれほど堂々と解放されてはいないように思われる。それでも思想はその本質においては純粋な音楽であり、またただその主題⁸⁾においてだけ懐古的で事実に関して煩わされる。確かに事実⁸⁾に煩わされざるを得ないが、なぜなら、人の霊〔精神〕はひばりのと違いただの怠け者ではなく、労働と知恵との忠実な記録者だからである。人は時に追われている。長く怠けるならば致命的であろう。人は怠惰にふけるように誘惑されている——人の言語とピラミッドと神話とが証している。けれども人の安全の利鞘は比較的狭く、そうした相対的に巨額の精力を、ひばりが軽い心臓と大きな態度で行うような単なる遊びに費やすことはできない。人の音楽には言葉がある。人は物に名を与える。自分自身の物語のリズムをとらえようと試み、あるいはそれを実際よりもより豊かでより崇高に思い描こうと試みる。人の祝祭は感情で重い。自らの生活がよって立つ出来事——取り入れ、弔い、償い、言い寄り、またいくさ——を記している。こうした厄介なことすべてを無視するならば、腑抜けかさもなければ狂信者になる。人には健全な哲学——夢ではなく注釈——以外にどんな価値ある熱中もない。人生を最も浪費しないとき、人の知性は最も強烈で勝ち誇る。というのも困難な思考が時折頭痛を起こすとしても、それは思考するからでなく困難だからである。我々の雑然とした脳は、思考できないということに気が障り空回りする。しかしもしビジネスに秩序があれば、

もはや骨を折って理解されることを求めない。知性はいくさの花であり恋の花である。どちらも結局は理解である。至福の瞬間、どんなに奇跡的に、我々は理解することか、どんなに遠くに飛ぶことか、どんな大量の事実を、一目で支配することか！ その時どんな労働もなく、どんな軋轢も模索もなく、知らないことに向かつての不安な体当たりもなく、この入り組んで広がったユーモラスな世界への喜び、ひばりと同じくらい天上的ではあるがより散文的な陶醉があるだけである。ひばりの歌がその気まぐれと怠惰と恍惚とによって一瞬世界の上に上るならば、人の歌は本質的にその視野によってそこに上る。前後を見ること⁹⁾は人の業である。明日を思わないこと¹⁰⁾やないものに焦がれないこと⁹⁾は、誠実なことでも人間的なことでもあるまい。私達は、百合の植物的な信心深さ¹⁰⁾に替えて人間的活力（それは技術である）をもって、ひばりの天然発露に替えて人間的視野（それは世界の知識である）をもって、この土台で出発しなければならない。

この別の次元において、もしも私達が寛大であるなら、たやすくひばり同様に幸せになれるのだが。人々は文明化し気安いときには、その慰みにおいて十分寛大で、子猫のように適度ニ気散ジ¹¹⁾をしたがるが、奇妙なことに少なくとも近代においては、思想に関してずいぶん野蛮で狭量なままである。落水のようにあるいは盲目のサムソン¹²⁾のように、彼等は思想を駆って、自分たちの利害ないし正当性という踏み車で、夜も日もおかず我がために働くことを欲する。彼等の愚かさや奴隷根性とに呪いあれ！ 自然が多くの労働で何か生き生きしたものを誕生させるとき、そこには不可避の思想が、既に、そして無償にあり、たぶん以前はあり得なかったことが、彼等にはわからない。頭脳の酷使は確かに歌うことや飛ぶことの習慣と同じく実用的であって、歌唱や飛行ははじめは疑いなくひばりが生き残ることを助けたが、それはまさに百合の白さがそれが引き寄せる虫の営みを通じてなしたようなものである。しかし物質的な器官でさえとても緩い紐によって効用に結ばれている。自然は、そのバロック的な装飾と悪徳とをそれが致命的とわかるまでは振り落とさず、また自分ではわからないなんらかの悶着によって実験を試みさせられるまでは、最も明ら

(114)

かな創意や喫緊の改良についてさえけっして考えない。自然は、どんな究極目的も持たず、惜しんだり急いだり慎んだりするどんな必要も持たない。いわずや精神を出し惜しむこともないが、その精神〔靈〕は自然に課税することも精力を消費することもなく、高らかに笑うもので、自然そのものの胸中において自らにとっての驚異であり神秘である。すべての動物的機能は、有効的であれ浪費的であれ、靈の領域においてこの第四次元性を持っている——この機能においてみいだされ得る喜び、あるいは悲しみ、あるいは美を。靈はそれが生きている飛翔の瞬間に濃密な詩を積み込む。それは実際に百合を色づかせずみれを香らせる。ワーズワースが発見する前はダヴ川の泉によってルーシーの魅力がそうだったように¹³⁾、その炎によって照らされる前は、受動的な秩序と事物の真理の中に沈み込んでいた無数の形態は、靈によって生き生きと現存させられる。自然のほほえみは計算できるものではない。そして靈を湧き出させる自然の変化する諧調は、惑星の合や食のようで、その特別な単純さにおいて感覚には十分明らかな事実であるが、しかし物質的には、各々自らの任に赴く旅人にとってのただつかの間の通過地点に過ぎない。ひばりの歌はさながら下に落ちて消える流れ星である。人間の知性は諸天球のより常なる音楽の一部である。

【訳注】

- 1) 後に出て、このエッセー全体にとって重要なシェリーの詩「ひばりに」の冒頭は、“HAIL to thee, blithe Spirit !”であり、ひばりが“spirit”と呼ばれている。この語は「精神」であるとともに「靈」であるが、このことからサンタヤナのこの文章においてはなるべく「靈」と訳すことにした。“spiritual”は「靈的」である。「精神」「精神的」と訳したところもこの「靈(的)」との結びつきがある。
- 2) シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) はイギリスの文芸家。オックスフォード大学在学中に小冊子『無神論の必然性』を配布して放校される。16歳の少女ハリエットと結婚。英国放浪後、スイスに行き、ハリエットの自殺後、無政府主義の思想家ゴドウィンの娘 (メアリ・ウルストンクラフト・シェリー、小説家、『フランケンシュタイン』の著者、母は『女性の権利の擁護』の著者ウルストンクラフト) と結婚した。『鎖を説かれたプロメテウス』は抒情劇で彼の代表作。詩人としてはイギリス・ロマン派の代表的な一人であり、「西風に寄せる歌」(1819)の結句、「冬来たりなば春遠からじ」は万人の愛唱するところ。論文「詩

- の擁護(1821)も有名。サンタヤナのこの文章はシェリーの詩「ひばりに」(1820年, 21連105行)を強く意識して書かれている。
- 3) 「靈感」 inspirationは「霊」 spirit (注1)を注ぎ入れることである。
 - 4) 「距離の感情」(pathos of distance)はニーチェの用語として有名である(『ニーチェ事典』弘文堂、に詳しい説明がある)が、ここではそれは意識されているようではない。「隣の芝は青く見える」のような意味で解してよいか。
 - 5) 「鳥の国」の原語nephelococcygiaはアリストファネスの喜劇『鳥』に出てくる。
 - 6) 原文“if I could cease to look before and after”。シェリー「ひばりに」の次の詩句を踏まえる。“We look before and after, /And pine for what is not: /Our sincerest laughter /With some pain is fraught; /Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.” (l. 86-90) 上田和夫訳「わたしらは前を見 うしろを見て／ないものにあこがれる／真実の笑いにも／どこか苦痛がみちている／もっとも楽しい歌は 悲しい思いをうたうもの」(『シェリー詩集』新潮文庫、1980、101頁)。ちなみに夏目漱石はここをこう訳している、「前を見ては、後へを見ては、物欲しと、あこがるゝかなわれ。腹からの、笑いといへど、苦しみの、底にあるべし。美しき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」(「草枕」『漱石全集』第四巻、岩波書店、1956、8頁)。
 - 7) ヘスティアはギリシャ神話で炉の女神。語源的にローマのウェスタと同じで両者は同一視されている。
 - 8) 原文“subject-matter”は「主題」という意味であるが、matterに(「精神(霊)」に対する)「物質」という意味があるのも意識した表現かもしれない。
 - 9) 注6) 参照。
 - 10) 「明日のことまで思い悩むな」(マタイ伝6:34)、「野の花〔欽定訳ではlilies of the field:野の百合〕がどのように育つのか、注意してみなさい。働きもせず、紡ぎもしない」(同6:28)、参照。
 - 11) desipere in loco ホラチウス「頌歌」IV、VII、28
 - 12) サムソンはイスラエルの士師。怪力でペリシテ人と戦ったが、敵の女デリラにより力を失った(「士師記」13-16)。
 - 13) ワーズワース(Wordsworth, 1770-1850)はイギリス・ロマン派の代表的詩人。『抒情民謡集』(1798)など。ここで言及されているのは彼の詩「ルーシ(二)」(「ダウの泉のほとりなる／片山里の乙女子を、／たたえるものも絶えてなく／いとしむものも稀なりき」以下略、『ワーズワース詩集』田部重治選訳、岩波文庫、1957、34頁)

